

# 上甕島里診療所実習レポート

8月27日から31日まで4泊5日の夏季実習を経験した。私は里診療所の鈴木済先生や看護師、事務の方々にお世話になった。今回の実習は初体験のことばかりであった。そのため濃く強烈な刺激を受けた。

1日目の午前中、里診療所で外来を見学させていただいた。外来の患者さんと、医師との会話を後ろから見させていただくことは初めての経験だった。診察の様子や会話を第三者の目線で見るとは勉強になった。1年生の私はまだ医学的な知識がほとんどないため、「6年生じゃないから、診察の勉強はできなくて学べることは少ないよね。」と先生に気遣っていただいた。しかし、先生が患者さんと世間話をしながらの診察風景を実際に拝見できたことが、今回の実習で最も学びがあった中の1つだ。先生と患者さんとの信頼関係を肌で感じる事ができたからだ。

地域にどれだけ溶け込めるかが、地域医療にとって大切なのだろう。鈴木先生一人で里1000人の健康を支えている。1000人皆から症状を素直に言ってもらえる存在になっていることで、適切な医療を提供できているのだと思った。「地域医療では、生活と仕事の境がない。」という先生の言葉が印象的だった。

午後からの往診は107歳や100歳など元気なお年寄りの方々を診察した。里の地域は高齢者の割合が非常に高いことに気付いた。高校が上甕にないため、どうしても若者が少ないらしい。往診が成り立つには、患者さんの生活を支えられる存在が必要不可欠だ。息子・娘家族は本土で働いているという方が何名もいらっしやう。地域医療では往診を主流にするには大きな障壁があるように感じた。

2日目は午前中にデイサービス、社会福祉協議会の老人ホームで実習した。そこで昔戦争で兵士として戦った方から経験談を伺った。捕虜となりロシアに石炭を掘らされ、貧相な食事しか与えられず200人栄養失調で死んだ話や、戦争中船が沈み、夜、逃げ場もなく船とともに沈んだ人や、何時間も泳ぎ続けて自分ともう1人救い出されたが、一人はほぼ力尽きかけていたため海に捨てられた話など衝撃的な内容ばかりだった。元兵士に直接話を伺えたのも初めてだった。貴重な話を伺えて、戦争の悲惨さも学ぶことができた。

4日目に特別養護老人ホームで実習をした。初めて認知症が進んだ女性と会話した。3分おきに同じ質問があった。「どこからいらしたんですか？初めてですか？お一人で？もう一人はどこですか？」認知症の方は昔のことはしっかり覚えていると耳にしていた。そこで彼女にお仕事何をされていたのか尋ねた。焼酎を作っていたと言う。「百合」という銘まで覚えていた。夕方水分補給の時間になったため、住民の飲む手伝いをした。ある一人の女性に飲ませようとしたら此方を睨みつけて「バカ」と暴言を吐いた。わたしは驚いてしまった。お茶を口にするのを固く拒み、一口やっとなら飲ませる度にバカと言われ続ける。水分補給は本人の意思の通りに放っておくという事はできないと職員に伺った。コップ1杯飲みきるまで続けた。これを毎日、職員さんは行っているかと思うと脱帽する思いだった。地域医療では、医師や看護師だけでなく、周りの住民や養護施設の職員方に支えられていることを学んだ実習でもあった。